

## まえがき

私が育った岐阜県伊自良村(現在の山県市)は、南北に貫流する伊自良川を囲むように山々が広がるとても自然豊かな地域でした。村の北部には釜ヶ谷山があり、標高は696 mとそれほど高くはありませんでしたが、伊自良川の水源地を有し、落葉樹林が広がっているような場所でした。

春は暖かな陽気とともに草木が芽吹く様子を眺め、夏は照りつける日差しに負けずアマゴを釣り、秋は紅葉する木々に囲まれながら山を登り、冬は霜焼けになりながらも雪だるま作りに勤しむ。そんなふうに、私は四季折々の自然の恵みを楽しんでいました。そして、それぞれの時期に出会える生き物が好きでした(ヤマビルは苦手でしたが…)。

こうした幼少期の生活を思い返すと、私が生物を好きになり、大学で生物学を専攻したいと考えるようになったのも自然な流れだったように思います。当時の私は、生物の中でも哺乳類が大好きで、特にライオンやチーターのような大型のネコ科動物が大好きでした。なので、それらの動物の行動を研究したくて、九州大学理学部生物学科に入学しました。しかし、大学の講義を受けているうちに、動物の研究よりも、植物の研究に惹かれている自分いることに気づきました。明確なきっかけがあったわけではありません。けれど、学部3年生の頃には、植物の研究ができる研究室に入ろうと決めていました。

最初は、植物生理学に惹かれました。植物生理学分野における主

な研究手法は、モデル植物（栽培・繁殖実験がしやすく、遺伝子情報の解明が進んでいる植物）であるシロイヌナズナ（アブラナ科）を用いた実験です。その最先端の実験に取り組む自分を想像して、ふと、地元の豊かな自然を思い出しました。

「外を歩きたいなあ…」

なので、実験室での作業が主となる植物生理学の研究室ではなく、野外調査が必須の生態学の研究室に入りました。そんな軽い気持ちで研究室を決めたの？と思われるかもしれませんが、まあ、そんなもんです。

こうして、私の初めての研究（卒業研究）が始まりました。とはいえ、実は、このときに着手した研究は、「植物の季節」がテーマではありませんでした。詳しい内容は第1章を読んでいただきたいのですが、結論から言うと、学部4年生の私が盛大にやらかして、研究テーマを変えざるをえない事態になります。そして、新しく登場した研究テーマが「植物の季節」でした。

植物は、季節の移ろいとともに、新芽を広げ、花を咲かせ、実をつけます。こうした「植物の季節」は、伊自良村で育った私にとって当たり前の変化でした。ただ、あらためて「植物の季節」を意識して野外を歩いてみると、今更ながら、春に咲く植物の多さに驚かされました。

「こんなに多くの植物が春に咲いていたのか…」

「なぜ、彼らは春に咲くのだろう…」

そんな疑問を発端に、私は「植物の季節」の研究にのめり込んできました。

当時の私がそうであったように、人は往々にして、植物の季節的な変化を日常生活における「風景」としか捉えず、その豊かさや複雑さ、面白さに気づきません。そこで本書では、植物の季節的な変

化の一端を紹介し、その面白さを語っていきたいと思います。

具体的には、「植物の季節」とは何なのかという説明(第1章)から始め、これまで私が取り組んできた調査や研究として、九州大学構内における植物の開花に関する野外調査(第2章)、東南アジア各地における植物の多様性調査(第3章)、ベトナムの山間部における植物の展葉・開花・結実に関する野外調査(第4章)、植物園で過去20年ほど蓄積された開花記録に基づいた統計解析(第5章)と紹介していきます。また、現在、私が所属する国立科学博物館(略称:科博)の標本室(ハーバリウム)や、そこに収蔵されている標本群(第5章)、私たち研究者が研究成果や専門的な知識を発信する機会(第6章)についてもお話しします。また、第7章には、大学生や高校生など、これから研究を志す方々へのメッセージを、まだまだ新米研究者である私の思いとしてまとめました。

本書が、この本を手にとってくださった読者のみなさまにとって、日常生活の「風景」を彩る植物に注目するきっかけになれば幸いです。

2024年10月

永濱 藍



## 目次

①	植物のフェノロジー .....	1
1.1	私とフェノロジー研究の出会い	1
1.2	フェノロジーとは	5
1.3	植物の様々なフェノロジー	8
②	いつ花を咲かせるのか? .....	11
2.1	植物が作る四季?	11
2.2	花の季節	13
2.3	フェノロジーの段階	17
2.4	樹木と草で違う?	21
2.5	「定量的に比較する」とは	24
③	植物の種多様性を知る .....	31
3.1	東南アジア研究のきっかけ	31
3.2	ベルトトランセクト法	32
3.3	熱帯植物調査の壁	40
3.4	分類学との出会い	43
3.5	未記載種か否か	47
3.6	調査地への恩返し	51
④	ところかわれば花かわる .....	59
4.1	未知のフェノロジー記述に挑む	59
4.2	ベトナムの熱帯山地林のフェノロジー	65
4.3	種間で同調する?	71

4.4	フェノロジーの緯度勾配	75
⑤	過去をさかのぼる	81
5.1	暖冬だと早く咲く?	81
5.2	ハーバリウムとは	88
5.3	標本の保管	90
5.4	標本の存在意義	94
5.5	標本の整理	97
⑥	伝え広めるために	107
6.1	研究者のアウトリーチ活動	107
6.2	オンラインでの発信	109
6.3	子どもに伝える	111
6.4	伝える発信	113
6.5	広める発信	115
⑦	研究者って何者?	121
7.1	なぜ研究するのか	121
7.2	研究者をめざしたいあなたへ	123
7.3	研究者の資質	127
7.4	博物館学芸員と研究	130
	引用文献	134
	あとがき	140
	植物フェノロジーの研究と博物館キュレーターへの招待 (コーディネーター 巖佐 庸)	144
	索引	150

## Box

1. 開花パターンの適応的な意義を説明する仮説 ..... 29
2. 自然と共に生きる ..... 54
3. 森林伐採の現場を目の当たりにして ..... 57
4. 植物が気候に影響を与える? ..... 105
5. リーディングプログラムにおける得難い経験 ..... 117
6. 植物学者が朝ドラに! ..... 119

